

「土木のプロジェクトを支えた戦士たち」 中部支部 土木の日シンポジウム 開催

土木学会中部支部は、広く一般の人々に土木事業とそれを支える技術の役割を考えてもらうおうと10月11日（土）に「土木のプロジェクトを支えた戦士たち」 - 土木の日シンポジウム - を名古屋市において開催し331名の参加を得た。（社）中部建設協会、（財）名古屋高速道路協会、（社）日本土木工業協会中部支部、日本電力建設業協会中部支部の協賛と国土交通省中部地方整備局、愛知県、NHK名古屋放送局の後援に心から感謝したい。

シンポジウムでは、まず、NHK総合テレビの人気番組「プロジェクトX - 挑戦者たち - 」の国井雅比古アナウンサーが「無名の英雄たちの物語～プロジェクトXの舞台裏～」と題して、番組の準備などを通じて知った技術者たちの人となり・情熱、技術的な困難、それから受けた感動などを番組では紹介できなかった話を中心に語った。リーダーの気迫や自信は現場をよく見ることに支えられている、プロジェクトを成し遂げた人たちには絶対あきらめない人が多い、日本のものづくりは職人の美意識のようなものによって支えられている、といった優れた技術者たちに共通する特性をまとめ、聴衆に深い感銘を与えた。

この後、奥野信宏 名古屋大学副総長をコーディネーターに、蛇川雄司 愛知県大規模プロジェクト対策本部長、須田 寛 JR東海会長、村田 進 中部地方整備局長を加えた4氏が「未来へのプロジェクト・土木技術の役割」と題して議論した。まず、蛇川本部長が万博、中部国際空港とそのアクセスの整備状況を紹介し、村田局長は今後の社会資本整備と新技術開発の方向（環境、IT、分野間の連携、フローからストックへ）を示した。須田会長は万博までのハード整備とソフト面の観光などを総合的に組み合わせた産業観光プロジェクトを提案した。これを受けて、万博後も含めてこれからのプロジェクトに対して、土木技術が果たすべき役割と国民の共感を得る方策などについて議論し、具体策を示した。

（中部支部事務局 愛知工業大学 内田臣一）



写真 技術者の情熱について熱く語る国井雅比古氏

大地震時避難生活の総合再現実験 自主防災型住宅におけるサバイバル実験

桐生市サウスパーク広沢（群馬県桐生市）の自主防災モデル住宅街区において、8月23日（土）から9月1日（月）の10日間、大地震時を想定した避難生活の総合再現実験が行われた。公共施設等の集団避難場所に代わり、自宅地内に設置されたユニット型地下居室（耐震性がきわめて高い）内で避難生活を送ることが技術的に可能であるかどうかを、群馬大学の学生らが実際に模擬避難生活を体験することにより検証した。実験にあたったのは、群馬大学工学部の鶴飼恵三教授、若井明彦助教授らの研究室と、自主防災モデル住宅を開発した、たてぬま建設㈱（社長：夢沼茂、群馬県桐生市）の共同研究グループである。自主防災という視点から、地震時に遮断された電源の代替となる非常用電源を各戸に設置された太陽光・風力ハイブリッド発電システムから供給、またあらかじめ各戸に備蓄されたタンクから必要最低限の生活用水を確保するなど、避難生活が長期化した場合にもある程度家族だけで自立した避難生活が営めるような工夫が施されている。この避難生活実験では、備えられた設備の個々の有効性検証はもとより、それらを組み合わせたシステムを実際に使用することで、複合条件下で各設備の性能が充分に引き出されているか、より効果的な各設備の相互利用関係の在り方は何かなど、総合的な自主防災システムの方向性について、技術的な考察を行うことを目標としている。地域の防災計画書によれば、発災後ある一定の時間を経過しないと援助物資（食糧配給など）が届かないことを前提とする必要がある。今回の実験では、非常用の食糧備蓄のほとんどない家庭（4人世帯）を想定して、日常生活中に冷蔵庫等に保管してある野菜やインスタント食品等（この量はあらかじめ一般家庭からアンケートした）を、救援物資到着前の避難生活での重要な摂取食糧源として考えることにした。各食品の腐敗進行度についても計測がなされた。その他、地下居室内外の温度や湿度の変化、避難生活での水、電気、トイレ（非常用）の使用量なども計測されており、今後の避難生活支援の在り方に関する基礎データとして一般に公開される予定である。

（群馬大学 若井明彦）



写真 配給食糧（想定）に基づいた食事をする避難生活実験学生